学 位 論 文 要 旨

氏 名 今川 美幸

題 目 教科化成立期における道徳教育の展開とその諸相
－授業を創り、振り返る教師の語りを軸に－

1、研究の目的

本研究の目的は、道徳の時間が「特別の教科 道徳」へと教科化される成立期の前後を中心に、告示された学習指導要領や兵庫県における指導資料を踏まえ、学校において教師がそれらをどう受け止め、対応しようとしてきたのか、教師の語りを軸にその足跡を辿り、その学びの一端を明らかにすることである。

2、研究の概要

序章では、本研究の構造を示すとともに「特別の教科 道徳」へと教科化されるまでの変遷を整理した。

第1章では、兵庫県教育委員会における道徳教育実践推進協議会を中心とした道徳教育推進事業に焦点を当て、教育施策の視点から道徳の時間から道徳科への変遷等について整理し、兵庫県の道徳教育の特徴を示した。兵庫県の道徳教育は、教科化以前より県独自の『副読本』と『指導資料』も作成されており、それらを踏まえると、道徳科の指導については授業後の振り返りも含めたマネジメントサイクルを意識した展開となっている。「特別の教科 道徳」全面実施後においても、兵庫県において取り組まれた道徳科の捉え方は概ね一貫しており、そのなかでも「道徳的価値の自覚を深める「展開（プロセス）」」を重視する教材づくり、それを基にした授業づくりが追究されていることを明らかにした。その教材観や指導観は、望まれる教育的環境のなかで子どもと教師とが共に考え、つくっていくという実存論的な教育観に立脚していると捉えられる。

第2章では、道徳の授業研究を実践した教師がその実践を通して何に気付き何を学んだのか、またその研究授業後の研修会において参加した教師同士の対話が授業改善のための“学び”にどのようにつながるのかを検討した。授業においては、教師が生徒の発言を受け止めることやどのように問うかを模索することの意味を明らかにした。また、教師のそうした姿勢が生徒の「いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢」へとつながることについても言及した。さらに、参加者は他者の発言と自身の経験とを結び付けて考えることで、自身の“学び”に繋げており、道徳の授業の特質からも事後検討会は、教師の実践的な指導力を身に付ける「格好の場」となる可能性を有していることを論じた。

第3章では、道徳科の評価の枠組みやその関連性を整理し、それらを踏まえた教師の実践的思考過程の一端について論述した。その結果、「道徳性そのものの新たな概念規定」、「評価の手続き」、「評価に耐える授業（評価の視点を生かした授業）」、「児童生徒と教師間の相互作用」等に係る示唆を得た。そこでは、まず道徳性を教師がどのように捉えているのかということが課題として浮上してきた。次に、道徳科ならではの評価の手続きに係る検討課題が明らかになった。さらに、評価活動を進めるにあたって現実的な作業量の問題や操作的、技術的な問題も見えてきた。最後に、評価に耐える授業を実践することや、励まされて嬉しいと捉えられる児童生徒と教師の関係性を構築することの必要性をあらためて確認することとなった。

第4章では、道徳科評価の研究開発に携わり、かつそれを道徳科完全実施後に実践した教師の振り返りを通して、その気付きや思考を支える典型的な言説を抽出してその特徴や背景を示した。そのことによって、道徳科における指導と評価に係る実践的課題の一側面を整理し、これからの改善に向けての配慮事項や手掛かりを得た。まず、これまでの各教科等における授業観を前提にして授業を受ける児童と道徳科ならではの捉えの狭間に立たされている教師の姿が見受けられた。次に、評価の導入によって道徳科の授業において教師は認知的な志向が前景化する可能性があることが明らかになった。その一方で、教師における道徳的行為における実践的志向が後退する懸念もあることが明らかになった。

補章では、道徳教育に関連があり、道徳科の授業で展開も考えられる人権教育について触れた。特に、道徳科では「現代的な課題」への対応も求められており、それは人権教育の課題とも交差するものでもある。そこで、改訂された兵庫県人権教育資料高学年用『ほほえみ』を手掛かりに、そこから窺い知ることのできる人権教育推進上の特質や課題を示した。ここからは、社会の進展やその状況の推移により、様々な人権教育上の課題が浮上し、それに対応した教材づくりが求められていることが確認できた。また、人権教育資料を教育課程のなかに位置付けて展開していくことや、子どもの発達段階を踏まえながら様々な人権課題を体系的・効果的に進めていくこと、さらには教師の人権課題解決に向けての意識や姿勢、その実践的指導力などの必要性を論じた。

終章では、本研究のまとめを行った。本研究は、「道徳の時間」から「特別の教科 道徳」への移行という時代の大きな転換点に遭遇することになった。そのため、それに応じて文部科学省によって提示された答申や学習指導要領等関係文書、さらにそれらを踏まえた兵庫県教育委員会による指導資料等に見られる施策を取り上げながら進めた。こうした一連の教育施策と学校における道徳教育の実践との直接的あるいは間接的関係に触れながら、本研究では学校における教師の道徳授業に係る実践や振り返り等を教師の語りを軸にその足跡を辿り、授業実践（評価を含む）を通じた教師の学びの一端を析出しようとするものであった。ここでは、こうした一連の関係軸を示すことで、より教師の営みの複雑性や多元性を示すこともできたと捉えられる。